科目ナンバリング							
授業科目名 <英訳>	英語勉強力Ⅰ English as a Foreign Language I			担当者所属 職名・氏名	国際高等教育院 准教授　青谷 正妥(アオタニ マサヤス)		
群	情報学科目群	分野(分類)				使用言語	日本語
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・開講期	2025・前期	曜時限	金5	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

【長文ですが、＊必ず＊全体を読み、納得尽くで講義を取ってください。講師の紹介・経歴は「その他（オフィス・アワー等）」を見てください。】

【危機感を持て】
国際的な英語の試験TOEFLで、日本人のSpeakingは世界最低の30点中15点、京大生の平均も15点ですが、これは大変な問題です。最近の脳科学・応用言語学の成果は、「speakingが流暢にできなければreading・listening・writingもスラスラとできない」という言語の進化学・生物学的宿命を確立しつつあるからです。また京大生の総合点は120点中78点ですが、これは全世界の受験者の平均点に過ぎません。

ちなみに、

■ プリンストン大学の留学生の平均は108点、
理系でも
■ スタンフォード大学のコンピューターサイエンスは113点を要求し、
■ MITの建築の一部は115点が足切りですが、

これらは、帰国子女や英語教員の多くが取れない点です。世界のノンネイティブの英語力は限りなくネイティブに近づいているのです。（http://aoitani.net/Eigo_Sekai_Saitei.html）

【講義全体の目的】>> 英語勉強力Ⅰ及びⅡに共通
著書『英語学習論』（朝倉書店、印税0%の本）の言語習得理論に基づいて、第二言語習得研究の詳細を解説し、多様なテストや運用練習を実体験することによって、英語学習にガイドラインとフレームワークを与えるのが本講義の目的です。大人の英語学習・教育には、計画的・本格的・多角的・意識的・組織的・形式的（文法等の形式も重んじるの意）な『かくしきを重んじる』アプローチが必須であり、学習者には自らの学びの構築　英語教育者・研究者を目指す人には応用言語学的枠組みの構築を可能とする講義です。今はやりのアクティブラーニングです。定性的理解と粗雑な統計処理に頼って来た第二言語習得の研究ですが、数理統計や脳科学を駆使した定量的で科学的な処理の導入で、詳細の理解が大きく前進しつつあります。科学的事実の提示・応用で＊新種＊とも言うべき「結果を出す」学習者・教育者を養成します。青谷の主観や『個人的見解』ではなく、言語学から統計学や脳科学まで、数十年に亘る、現在も進行中の、第二言語習得・外国語教育研究の客観的成果の結晶です。

本当に英語が出来るとは、思考から始まる言語活動全体が英語で完結する事ですが、そのような離れ業が簡単に達成できる訳がありません。大人の言語学習の実態を知り、その特性を生かして効果・効率を追求しなければ、成功は不可能です。実際、「大人の言語習得の最大の特徴は普通は失敗することである」との主張は、応用言語学の定説です。

英語勉強力Ⅰ(2)へ続く↓↓↓

英語勉強力Ⅰ(2)

IおよびIIを通しての本講義の両輪は
A. 第二言語習得研究が示唆する大人の英語学習の実態・特徴と、それに基づいた英語学習・教育の方法論を解説する。
B. 実力診断テスト、運用力養成訓練による第二言語習得法の理解の深化・真化・進化を図り、学習・教育・研究の効果と効率を上げる。
であり、両者が同時進行しますが、前期（I）はAの理論的フレームワークの説明と診断テストにも時間を割き、後期（II）は運用力養成訓練の実際に大きな時間を割きます。但し、最近の第二言語習得の研究は、特に脳科学の領域等において、毎月一つ新しい成果が出るほど急速に高度化しているので、後期（II）でもフレームワークの改善は続きます。

大きなポイントはこれです。
◆「普通は失敗する」大人の英語学習・教育に成功するためには、その実態を深く理解した上での戦略的学習・教育は不可欠である。
◆「10年・1万時間を要する」と言われる外国語の習得なので、正しいやり方で正しい方向に進むことが肝要である。（10年間見当違いな学びを続けた際の成果の小ささとダメージの大きさは容易に想像できますね。）

要するに漫然と学習するだけでは駄目で、「正しい学び方・教え方」が成功と失敗の分かれ目となるのですが、この点の理解不足がこれまでの英語教育・学習の最大の欠陥でした。

0. 受講者がそれぞれの専門分野で活躍出来る英語の四技能を身に付ける
という大目標達成のために、

1. 大人の英語学習・教育の特性を理解し、
2. 具体例を見て勉強の仕方を学び、
3. もちろん講義内でも練習を重ね、
4. あくなき効果と効率の追求の中で、
5. みずからの学びを作り、

A. 英語学習・教育の難しさの理解を、
B. 途中でくじけない『ハートの強さ』につなげる
のが英語勉強力 I, IIの存在理由ですが、講義を踏み台に、講義外で自己研鑽に励んでこそ、真の上達が有り、クラス外、学期終了後の自習サポートもします。

[到達目標]

脳科学に基づいた大人の英語学習の実態を理解し、効果と効率を追求する自らの学びを構築する。

とりわけ、受験勉強では培われなかった手続き的知識の養成法を理解し、訓練の脳内road mapを作成する。

【大事な注】
ところで、10年・1万時間（例えば1日3時間で10年間）を要する外国語習得であるので、1学期のみの学習で運用力獲得と言う意味での目立った成果は得られない。よって、実際のテストスコアのような数値目標はない。TOEICやTOEFLの点だけであれば、統計的揺らぎにより、学期後の方がわずかに点が下がる事すらある。

過去の例から、長期的な伸びの経験則（過去の京大生のデータ）としては、

英語勉強力Ⅰ(3)へ続く↓↓↓

1. 4年生終了時にTOEFL 100点以上、TOEIC 950点以上
2. 勉強開始（本講義を取った時）から10年後にTOEFL 110点以上、TOEIC 990点（満点）

は標準的なケースである。もちろん、1日3時間の勉強を10年続けたとして。

[授業計画と内容]

『英語学習・教育の方法論』：前期（I）に全体をカバー、後期（II）に補足
第I部：英語運用力の本質と学習戦略
1.1　知識の二重螺旋：宣言的知識と手続き的知識
1.2　流暢さと自動性
1.3　流暢さ養成の4要素
1.4　熟成から覚醒へ
1.5　記憶について：処理水準、転移適切性処理、示差的処理
1.6　英語教育・学習の四重螺旋：意味重視、言語形式、流暢さ
1.7　精と多の二重螺旋
1.8　弱点の脳内データベース：DEARと拡張DEAR
第II部：結果を出す学習法
2.1　大人の英語学習：「かくしき」を重んじる
2.2　語彙の強化
2.3　聞く：リスニングの4ステージ、教材選択と聴解の仕上げ
2.4　読む：多読・精読の二重螺旋
2.5　話す：Leveltの発話モデル、発話のための内容の仕分け、スピード・正確さ・構文の高度さ、録音チェック
2.6　書く：課題作文、他の日本人の間違いから学ぶ
2.7　スピードの目安：ネイティブ vs. ノンネイティブ
第III部：言語の進化と脳科学から見た「話す・聞く」の優位性
3.1　ヒトとことば：言語の起源・進化
3.2　なぜSpeakingか？：話し言葉の優位性
3.3　SpeakingとListeningとReadingの連携
3.4　ネイティブも音韻情報にたよる
3.5　思考・概念と言語：豊かな思考・貧しい言語、速い思考・遅い言語、熟考に言語は必須、言語は「ことば足らず」

『テスト群』：前期（I）は英語力診断テスト、後期（II）は運用力養成テストが中心です。
語彙、文法判断、短文聴解、長文聴解・読解、穴埋め聴解・読解、ディクテーション、音素の聞き分け、単語の聞き取り等

『運用力養成訓練』：この訓練は前期（I）では方法論の応用例としての位置づけ、後期（II）では中心課題です。
実際の訓練は以下の様になります。（恒常的に改善中の実例はカッコ内のURL。）
A. 独話：短いお題（例：一番辛かったこと）につき、15秒考えて45秒間一人でしゃべります。（http://aoitani.net/TOEFL_Speech/TOEFL_Speaking.doc）
B. 会話：短い話題（例：大学の何を変えたいか）につき、2分から3分でペアで会話をします。（http://aoitani.net/TOEFL_Speech/Conversation_Questions.doc）
C. ディクテーション：ハイレベルです。僕が黒板にディクテーションをします。

英語勉強力Ⅰ(4)へ続く↓↓↓

D. 意訳・略訳・概訳・近似訳の訓練：大学生が日常生活で普通に使う日本語の短文の意味の概略を現有戦力の英語力で最適近似します。
（http://aoitani.net/Q_D_Trans_1.doc http://aoitani.net/Q_D_Trans_2.doc）
E. ネイティブ用の作文トピック：ペアワークです。相方に3分で自分の意見をまとめて言います。『人は少数の人に影響されて人格形成をすると信じるが、実際には社会全体・人類の歴史全体が人を作るのではないか』とか、高度な物が多いです。（http://aoitani.net/GRE_topics.doc）
F. 前回の作文の宿題のトピックについて、つまり既に書いた作文の内容等を思い出しながら、今度は口頭作文をします。
（http://aoitani.net/TOEFL_Speech/TOEFL_Writing_Topics.doc）

[履修要件]

【一回目の授業への出席】
一回目の授業への出席、実力測定テストの皆受験が必須。

【欠席報告など】
更に、病気や事故等を除き、講義にすべて出席し、正当な理由が有っても欠席の事前報告を怠らない事、TOEIC・TOEFLの結果を報告する事などが履修要件。

【真摯な態度】
『真摯な態度で学び、小中高の学生や社会人がやらない事は大学生もしない』に集約されます。

[成績評価の方法・観点]

中間・期末試験は有りませんが、出席だけは非常に重んじます。毎回授業に出席し、宿題をやり、能力測定テストを全て受ける事が単位取得の最低条件です。

点数の算出は、客観的な統計処理による相対評価と主観的な講師の判断による絶対評価を組み合わせて行われます。

まず授業中のテストの素点をRasch analysis（詳細は数理統計学やソフトウェアの知識がないと分からないかと思いますが）にかけ、標準化された能力値を計算します。ここまでは純然たる相対評価です。次に最低値の人が60点で最高値の人が100点と言う単純なスケーリングで良いか、点数の分散状態や平均値からの距離を見て青谷が主観的に検討します。京大生の実力は然程違わないのに、機械的な計算では誰かが60点で誰かが100点になってしまうからです。また、outliersと言って、特別に出来る人や特に出来ない人がいると、computerの判断だけには委ねられないので、人間（＝青谷）による絶対評価も取り入れています。このプロセスでは、機械的な計算値より点数を上げることはあっても、下げることはしません。

[教科書]

使用しない
授業中のhandout（配布物）とネット上の教材のみ。
講義・練習は、下記『英語学習論』に基づいていますが、教科書は有りません。

[参考書等]

（参考書）
青谷正妥(あおたにまさやす)『英語学習論』（朝倉書店）
青谷正妥（あおたにまさやす）『英語勉強力』（DHC出版）
因みに、両書とも僕の印税は0%です。本当です。
今は化粧品の会社ですが、DHCは元々は出版・翻訳の会社です。DHC＝DaいがくHoんやくCenter（大学翻訳センター）、これも本当ですよ！

英語勉強力Ⅰ(5)へ続く↓↓↓

英語勉強力Ⅰ(5)

（関連ＵＲＬ）

http://aoitani.net/

[授業外学修（予習・復習）等]

まず、handouts（配布物）の熟読が基礎としてあり、それに基づいて：

流暢さの四要素である

1. 十分な宣言的知識の獲得
2. 大量学習
3. 反復学習
4. 時限訓練

を授業外で（学期終了後も！）続ける。

学習指針は以下に有ります。
http://aoitani.net/How_to_acquire_proficiency_in_English.pdf

[その他（オフィスアワー等）]

【オフィスアワー】
5年間に亘り、アメリカ的なオフィスアワーを設け、その間は研究室に居ました。しかし、学生さんが来られた事は3,4回しか無かったのです。それよりは講義後の質問の方が遥かに多いので、現在はアポイントメント制にしています。尤も、講義後が一番好都合かもしれませんので、これまで通りその形でも結構です。

【講師の紹介】
京都大学理学士（化学）、カリフォルニア大学バークレー校理学博士（Ph.D. 数学）、テンプル大学教育学博士（Ed.D. 第二言語習得＝外国語学習・教育）。本学理学部大学院1回生の途中で渡米し、20年間滞米。プリンストン大学、カリフォルニア大学、MIT等で教鞭を執り、シリコンバレー等での企業経験も有る。英語検定1級、TOEIC・TOEFL iBT満点、GRE Verbalが89%。＊しかし＊、これを見てください。（http://aoitani.net/Eigo_Taihen.html）

【授業外学習と学期終了後の継続学習は必須であり、そのサポートもします。】
担当教員は、多分変人ですが善人です。『天地の真理を追究し』『清く正しく美しく生きる』のが人生の目標です。また、一部茶髪等、見かけは若そうですが、昭和29年（敗戦屈辱の昭和20年代）生まれですから、考え方は完全にオジンです。「信義」などと言う言葉が出て来ても驚かない様にして下さい。それから『小・中・高の学生や一般社会人がやってはいけないことは、当然大学生・大学院生もやってはいけない』と考えるので、無断欠席・遅刻・授業中の私語には本気で怒ります。更に、『恥部も患部も曝（さら）け出し、敢然とその解決・改善にあたる』主義ですので、自分自身についても日本人全般についても、欠陥でも何でも、事実であればその通りそのまま述べます。日本人の国際性の無さを示すデータや事例、京大生も日本人も英語力が世界最低レベルである事を示すデータ・テストスコア（http://aoitani.net/Eigo_Sekai_Saitei.html）、先進47経済圏で最下位の47位にランク付けされている日本の大学教育（研究に非ず）の現状（http://aoitani.net/47th.pdf）、授業料を差し引いても一人頭138万円かかる京大生の教育費
(http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/financial_report/documents/2014/financial-2014.pdf 12ページ)
等がその例です。モットーが『直角・平行・全開』ですので、青谷の間違いだらけの英作文の公開（http://aoitani.net/Essay_Corrections/Masayasu_AOTANI.doc）
など、自分自身の恥部や患部も曝け出しています。

英語勉強力Ⅰ(6)へ続く↓↓↓

英語勉強力Ⅰ(6)

[主要授業科目（学部・学科名）]